

東日本大震災によって壊滅的な被害を受けた宮城県名取市閑上地区の、旧閑上中学校敷地に建てられる「閑上の記憶」を、学生たちは訪ねた。ここでは、閑上の人たちが語り部として、訪れた人々



閑上で語り部の言葉を胸に刻む 「過去から学んでほしい」

に震災の記憶と、「いのちの大切さ」を伝えていく。未来のことを考える。学生たちは、語り部の小齋正義さんの話を聞いた（写真）。

「地震が起きた後、津波警報が発令された。その後に、仲の良かった隣家人の人と話をすることを今でも鮮明に覚えている」と話し始めた。

「避難しよう」と声を掛けたが、隣の家からは「後から行くよ」の返事。小齋さんはその返事を聞いて、先に避難した。

「あの時以来、連絡は取れていらない。『なぜ強引にでも一緒に避難しなかったのだろう』と、当時の自分の行動を後悔してやまない」と今の気持ちを語った。

「私たちのような悲しみを二度と起こさないために、いのちの大切さを

閑上からずっと発信し続けている。未来のことを考へることも確かに大切だが、それはあくまでも予測でしかなく、私たちは過去から学び、日頃からさまざまな想定をして避難訓練をすることや、その経験を社会に発信していくことが重要だと感じている。皆さんには今回現地を訪れて経験したことや感じたこと、私たちの思いを、社会や少しでも多くの人たちに発信するとともに、与えられたそのいのちを精いっぱい生き切ってほしい」と強く語った。

学生たちは、小齋さんの言葉に聞き入った。そして、同施設で津波の映像と、展示される被災者の遺品を見ながら、悲しみや被災の大きさを心に刻んだ。